

# 『サード・ウィンター』

## デザイナーノート

By アントニー・パーケット

私は70年代初頭、『ドラク・ナッハ・オステン』【「東方への衝動」を意味するドイツ語で、GDWが1973年に出版したバルバロッサ作戦から冬期反攻までを再現するビッグゲーム】の黄金時代からイギリスでウォーゲームをプレイしてきました。東部戦線は常に私の大きな関心事であり、過去45年間、このテーマに関する本やゲームを収集してきたのです。私はある日、ディーン・エスイグというデザイナーの『ゲデーリアンズ・ブリッククリーク』【1992年に出版された最初のOCSゲーム】という作品に出会いました。このゲームは、東部戦線を作戦レベルで正確に表現していると私が感じられるルールやアイデアに溢れていました。このゲームをプレイしてみた後、私は夢中になってディーンとジ・ゲーマーズが出版したすべてのゲームをプレイしました。今から5年前にコンシムワールドで、ジョン・キスナー【2009年出版の『バルティック・ギャップ』のデザイナーで、2010年代にOCS班長を務めた】と私はハンバーガーを食べながら、私の頭の中にあったOCSゲームのアイデアを検討しました。90年代に出版された『フーベズ・ポケット』【1996年に出版されたOCS第4作】は1943-44年のウクライナにおけるキャンペーンのごく一部を描いていましたが、そのキャンペーン全体の規模の大きさと激しさは、それまでの戦争では見られなかったほどのものでした。ジョンと私が話し合ったのは、OCSでこのキャンペーン全体を再現する方法についての私のアイデアでした。ジョンがデザインした『バルティック・ギャップ』も卓越した作品でしたが、これも私が作りたいと思っていた大規模で長期のキャンペーンと比較すれば短期のもので、戦争のあの時期の赤軍の強さと限界のすべてを表すことはできていませんでした。私はジョンとディーンの名に強く勧められ、MMPのデザイン手法を武器に、自分のゲーム『サード・ウィンター』の制作に取りかかったのです。

参照した資料は、予想通りではありませんでしたが、多くのケースで矛盾していました。またゲームの規模を考えると、部隊の構成

や配置が1943年から44年にかけて急速に変化したことも問題となりました。例えば、1つの戦車軍団が12個のユニットを持つことになってしまうケースもあったのです。そのため、私はデザイナーとして、ユニットを登場時の編成に固定し、また配置の情報について食い違いがある場合には『Lage Ost maps』【巻末の参考文献一覧にある『Lage Ost situational maps Sept 43-Apr 44』】を使用するという決断をしました。また、ドイツ軍が師団単位の戦闘力としては崩壊し始めていることを表現するために、小さな戦闘ユニットについてもデザイナーとして多くの決断をしました。多くの部隊が到着しつつも、それらはすぐに既存の戦闘団に吸収されたのです。そのため、いくつかの資料で明確に記録された部隊はカウンター化される一方で、そうでなかった場合にはカウンター化されなかったということもありました。

これらの決断により、ジョン(後にはチップ【現在のOCS副班長でこの作品のデベロッパーであるチップ・サルツマン】)から言われていたカウンターの数の範囲内になんとか収めることができました。しかし、私はすべての必要なユニットを含めることができたと考えています。従って、デザイナー仲間のローランド・ルブラン【OCS『ビヨンド・ザ・ライン』のデザイナー】の言葉を借りれば、「戦闘序列は1つだけで、それが正しいものだ」ということになります。私はこれを達成できたと思っています。しかし私はそう思うとしても、そう思わない人もいることでしょう。

私がソ連軍に関してデザインを中心とした考え方は、当時のソ連軍の戦闘組織を表現するというものでした。それは素晴らしい打撃力と持続力を持っていましたが、指揮統制は硬直していました。ソ連軍はそれまでの激しい戦闘で鍛えられており、狙撃兵師団は自走砲(SU)と対戦車部隊に支援されていました。アクションレーティングも上昇し、ソ連軍初のAR5の精鋭部隊が登場します。しかしこの軍隊は、硬直した指揮系統からもたらされる限界に悩まされていたのです。これらは正面軍司令部とRVGKの構造によって強調されています。その結果、同時に1つの完全な力としては使用することができない大集団となりました。

私のデザインの支柱となっているのが、正面軍とRVGKの間での指揮統制と部隊

再建のシステムです。強力な4つのウクライナ正面軍は緊密に協力して、2つのドイツ軍の装甲軍、2つのドイツ軍の歩兵軍とその同盟国軍を打ち倒さなければなりません。このゲームには、戦争のこの段階でのドイツ国防軍の機械化部隊の85%と、赤軍の75%が含まれているのです。この膨大な数のユニットはチームプレイに適しており、1944年4月までの間の絶妙なバランスのゲームを生み出しました。アドバイスをくれたり、様々な挑戦をしてくれた忍耐強いテストプレイヤーの方々には感謝してもきれません。彼らの大変な努力のおかげで、このゲームはより良いものになったのです。これまでのOCSゲームの出版状況を考えると、東部戦線のゲームにドイツ軍が防勢を行う『サード・ウィンター』が加わったことで、独ソ両軍にとってバランスが取れたのではないかと思います。

親しい人々に感謝の言葉を。ディーン・エスイグは「大西洋の向こうから来た男」へ惜しみなく支援を提供し、励ましてくれました。ハンス・キーシェルには、イラストレーターとしての腕とマップのアートワークにとっても感謝しています。カーティス・ベア【現在のOCS班長】はとても気が合う人で、ユーモアのセンスがあり、細部にまで気を配ることができる人物です。ジョン・キスナーはこのプロジェクトを立ち上げてくれました。最後になりましたが、非凡なデベロッパーであるチップ・サルツマンには、彼の指導、優れたアイデア、そして忍耐力に感謝しています。最後に、このゲームを二人の方に捧げたいと思います。まず、愛する妻ヘレンに。彼女は当然ながらこの趣味を良く分かってはいますが、いつも励ましの言葉とコーヒーを提供してくれました。そして、親友でゲーム仲間でもあるマーク・ランダルに。彼は私の30年来の友人で、テーブル越しに表情を変えずに意味深なジョークを言うユーモアのセンスを持ち、OCSに関しても知識が深く、そのプレイスタイルから「大食い」というニックネームで呼ばれています。

# デベロッパノート

By チップ・サルツマン

「締切だとか責任だとか

一体何を残せばよくて

何を捨てればいいんだろう？」

— 「アゲインスト・ザ・ウィンド」

(ボブ・シーガー) の歌詞から

デベロッパの仕事は、本の編集者の仕事に似ています。優れた応募作品もあれば、大がかりな書き直しや修正が必要な作品もあるでしょう。私は幸運にも、アントニー・バーケット氏によるデザイン性の高い作品に関わることができましたが、この作品にはジョン・キスナー氏がすでに行っていたデベロッパ作業が大きく反映されていました。

我々は下記のような問題の解決に多くの時間を費やしました。

**ソ連軍の正面軍** 『サード・ウィンター』に出てくるソ連軍の4つの正面軍をどのように表現するか？ 正面軍は、ソ連軍の指揮と後方支援における主要な作戦上の重点でしたが、OCS ゲームではこれまで表現されていませんでした（このコンセプトは、すぐに『ハンガリー・ラブソディ』にも持ち込まれました）。史料を読んでいると、正面軍は Stafuka の命令により「攻勢態勢」か「再編態勢」のどちらかになる傾向がありました。ここから、『サード・ウィンター』に登場する各正面軍は「オン」の状態として攻勢態勢に、「オフ」の状態として再編態勢になることにしました。正面軍が攻勢態勢でいられるターン数には制限がありますから、正面軍の「オン」と「オフ」の順番が重要になってきます。プレイヤーは、可能であるすべてのターンに攻勢態勢でいる必要はないのに気付くでしょう — スイッチを入れ、いくつかの要所を占領し、ドイツ軍に課題を抱えさせ、「再編」に入って別の場所で攻勢を行う — これを繰り返すのです。戦争のこの段階では、正面軍はある程度の深さまで進んで後方支援の限界に達した後、次の攻勢のためにリセットを行う傾向がありました。我々は正面軍の「オン」と「オフ」の期間や、同時に攻勢態勢でいられる正面軍の数について、慎重に議論しました。1944 年を部隊

にした今後の OCS ゲームでは、複数の正面軍が、より効果的な戦車や騎兵軍団と共に、深く入り込んで攻勢を行うこととなります。

**ランダムイベント** このためのリサーチは大変楽しいものでした。『ビヨンド・ザ・ライン』のコンセプトを引き継ぎ、キャンペーンの流れを大きく変えることなくゲームに変化をもたらすような歴史上の（あるいは歴史的に妥当な）イベントを探しました。これらのイベントの中には例えばヒトラーの総統指令第53号のように、マンシュタインが火消し部隊を活用して機動防御を行うというドイツ軍の防御方法に大きな影響を与えかねないものもあります。

**ソ連軍の SU ユニット** OCS システムにおけるソ連軍の SU（自走砲）ユニットの表現は、課題の一つでした。これらは装甲戦闘車両ではありますが、その多くは枢軸軍の突撃砲のような使い方はされていませんでした。さらに、戦争中にソ連軍が連隊と呼んでいたもののほとんどは、作戦上は大隊規模でした。我々は多くの OCS ゲームデザイナーに、これらをどのように表現するのがベストであろうかと相談してみました。この「SU 大論争」の結果が、下記のものでした。



**SU-76** = 戦車 + 砲兵 + 無色。『サード・ウィンター』上では 2-2-6 大隊となっています（6-2-6 旅団も 1 つあります）。SU-76 は主に自走砲や支援用の突撃砲として運用されましたが、戦車対戦車の交戦では持ちこたえられませんでした。

**SU-85** = 対戦車 + 無色。3-2-6、または 3-3-6 大隊として表現されたこの車両は、85mm 対戦車砲を積んでおり、主な役割は敵戦車を破壊することでした。同じ砲を搭載した T-34/85 が大量に配備されたため、時代遅れなものとなりました。

**SU-100** = 対戦車 + 黄色。SU-85 の後継で、非常に強力な 100mm 砲を搭載していました。大量生産されたのは 1944 年末のことで、『サード・ウィンター』には登場しません。

**JSU-122 / JSU-152** = 戦車 + AG + 黄色。4-3-5、4-4-5、5-4-5 大隊で表現されています。SU-122（T-34 シャーシで製造）と SU-152（KV-1 シャーシで製造）は、『サード・ウィンター』の時期に JSU バージョン（ヨシフ・スターリン戦車シャーシで製造）に取って替わられました。これらは真の突撃砲であり、ティーガー戦車の砲塔を吹き飛ばすことができる、非常に強力な駆逐戦車でもありました。

**ソ連軍の戦車部隊** 戦争のこの時点で、ソ連軍の戦車は「大群」の段階に達していました。4つの正面軍には、キャンペーン開始時に約 5,000 輛の戦車がありました。ゲーム中を通してほとんどの戦車旅団には、T-34/76 の派生型と、新たに登場したより強力な砲を持つ T-34/85 が混在しています。ソ連軍の戦車部隊は様々な車輛を使用する傾向があり、このキャンペーン中にもその時点で主流であった車輛を再装備しました。ソ連軍は多くの戦車部隊を連隊と名付けていましたが、OCS の RE 換算では大隊規模となります。いくつかのカウンターについて以下で説明しようと思いますが、完全に統一されているのだとは考えないようにして下さい。

**10-5-6 親衛戦車大隊**  
これは JS-2 戦車を装備しており、このキャンペーンの終盤に配備されたばかりのものでした。ソ連軍は大隊単位で配備していました。

**5-4-5 親衛戦車大隊** 親衛部隊は編成時の戦車 30 ~ 34 輛に近い状態に保たれていたため、若干高い評価になっています。これらのユニットは KV-1 や KV-85 を中心とした重戦車を装備しています。

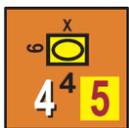
**8-4-8 親衛戦車大隊** 完全戦力では通常、65 輛の T-34 戦車を装備していません。

**4-3-6 戦車大隊** これらは軽戦車が混在した部隊で、通常は歩兵支援に使用されていました。



5-4-4 (第5親衛戦車軍団の第48)親衛戦車大隊

この部隊はレンドリースのチャーチル戦車を装備していました。速度は遅かったものの、ソ連軍兵士はその装甲の厚さと信頼性を好んでいました。



4-4-5 (第6)親衛戦車旅団

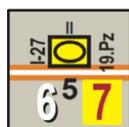
この部隊もレンドリース戦車を装備していますが、この場合はマチルダIIでした。十分な数を持っていたため、規模は1REとしました。

**ゲーム間の一貫性** 目の肥えたゲーマーなら、以前のOCSゲームのユニットからのいくつかの変更点に気付くでしょう。徒歩移動のみのユニットで唯一のAR 5である第2降下猟兵師団は、移動モードでの移動力が6ではなく5になっています。この部隊は移動力が6となるほどの輸送手段を持っていませんでした。枢軸軍の鉄道工兵ユニットの移動力は、初期のゲームのものはスピードが速すぎると考えたため、3としました。ソ連軍の鉄道輸送力も、他の東部戦線のOCSゲームに比べてかなり低く見えるでしょう。この「失われた」鉄道輸送力は、SPを正面軍司令部に届けたり、RVGKボックスに／からユニットを移動させたりするのに使用されています。

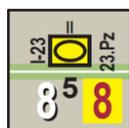
**ドイツ軍の戦車部隊** 枢軸軍はこのキャンペーンの開始時に約2,000輛の戦車を持っていました。ドイツ軍の戦車部隊は、使用可能なあらゆる戦車を使って積極的かつ大胆に困難に対応しました。彼らは多くの場合、その数よりも遙かに大きな影響力を持っていたのです。しかし、ドイツ軍の戦車部隊には様々な設計の車輛が混在しており、過剰なほどに独自の部品を必要としていました。ティーガーやパンターは、ちょっとした修理のために履帯と転輪をすべて取り外さなければならないことがありました。新しい戦車を作ることを優先していたために予備部品が重視されず、ほとんどの大隊は、戦闘で破壊された戦車よりも多くの戦車を放棄しなければなりません。

「特定の師団の、どのようなユニットがマップ上にあるか」ということになると、

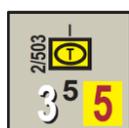
第3装甲師団のような部隊では、このキャンペーン中の様々な時点の様々な編成状態を表現するために、さらに5つのカウンターが必要だったかもしれません。第3装甲師団のパンターだけで構成された大隊は1944年後半になってようやく到着しましたが、同師団(および他の装甲師団)はその時点までにその場しのぎのパンターの納入を受けていました。我々はゲーム全体で各装甲師団の最適な表現を設定しましたが、ドイツ軍全体を増援スケジュールと補充レートによって管理しました。これにより部隊の歴史的な流れを作ることができましたが、プレイヤーにとっては、どの師団を再建するかを常に決断しなければならないという課題もあります。これは、ソ連軍を食い止めようとする歴史上の指揮官の判断に近いものです。このゲームでは史実通りに1944年の春までにほとんどの装甲師団の構成ユニットが壊滅してしまい、プレイヤーは手持ちのあらゆる部隊を使ってなんとか戦線を維持することになるでしょう。それにまた、カウンターシートをさらに数枚追加するようなことは不可能でした！ 幾人ものリサーチ担当者が何冊もの資料を丹念に調べ、標準的でない戦力の部隊もゲームで使用されるユニットに反映されるようにしました。ドイツ軍のユニットは、主に使用されていた車輛毎に分類されています：



7 移動力を持つドイツ軍の装甲部隊は、後期型のIII号戦車(50mm 砲搭載)と長砲身の75mm 砲を搭載したIV号戦車(F、G、H、J型)を装備しています。

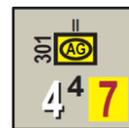


8 移動力を持つドイツ軍の装甲部隊は、主にパンターを装備しています。信頼性と印象は低いものの、優れた火力と防御力を持つ、第二次世界大戦で最高の戦車の一つとされています。

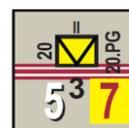


ティーガー部隊には兵科マークに「T」の字が付けられています。OCSシステム上で、このような小さくても強力で作戦上大きな影響を与えるユニットを表現する方法には、いくつかのものが考えられました。最初我々は、特定の

ユニットを「重」戦車に区分し、また同様に「重」対戦車効果を持つユニットを作る等の方法を考えていました。しかし最終的にはこのやり方をやめ、アクションレーティングの高い中隊規模のユニットを採用しました。これは、史実でのティーガーの運用方法を反映したものです。



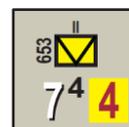
突撃砲ユニットは基本的に、長砲身の75mm 砲を搭載したIII号突撃砲またはIV号突撃砲です。



黄色の対戦車ユニットはマダーIIIと、Sd.fz.250 / Sd.Kfz.251の様々なモデルを装備しています。



黄色でない対戦車ユニットは、旧型のマダーを装備しています。これらは対戦車プラットフォームとしては時代遅れになっていましたが、苦境に立たされている枢軸軍にとってはいくばくかの助けとなりました。



7-4-4 (第653)重駆逐戦車大隊は、フェルディナントを装備した部隊です。1943年末、クルスクの戦いを生き残った車輛がその経験を基に改造されたものでした。この部隊はイタリアで戦った後、このキャンペーンの後半の戦闘に間に合うように再び送られてきたのです。フェルディナントは1944年5月にエレファントと改称されました。



3-3-6の戦車+砲兵の部隊は、105mm 榴弾砲を搭載したIII号突撃砲F型を装備し、歩兵支援に使用されました。

**RVGK** 我々はこのルールを非常に気に入ったので、ほとんど変更せずに『ハンガリー・ラブソディ』にも採用しました。ソ連軍のやり方は、部隊を完全に消耗してしまうまで使い切るというものでした(特に戦車/機械化軍団に関してそうでした)。その後それらの部隊は撤退させられ、休息、そして再編成が行われたのです。RVGKのルールにより、戦略的な再配置も可能に

なっています。

**ルーデルと対戦車攻撃機** 『ハンガリー・ラブソディ』で採用されたルールでしたが、これも非常に良いものであったので『サード・ウィンター』でも使用することにしました。ルーデルの戦歴は驚くべきものでした。彼は500輛以上の戦車と数百輛の車輛を破壊したと言われており、第二次世界大戦で最も多くの勲章を受けたドイツ軍人です。

**ソ連空軍** 我々はデベロップ中に、ソ連軍の航空任務のヘクス制限を何度か変更しました。ソ連軍は航空部隊を戦術的に使用し、前線からあまり離れないようにしていたのです。ゲーム中、ソ連軍の柔軟性が増すにつれ、特定の航空軍に割り当てられていないユニットの数が増えていきます。

**勝利条件** これとSPレベルの調整が最も難しいものでした。我々が目指したのは歴史的に正確な（作戦上の）目標をプレイヤーに提供することでしたが、プレイヤーが直面する課題も反映させたものになっています。そして、それをできるだけシンプルに実現しました！

**再編態勢のユニットでノーコストの砲爆撃とは！？** 赤軍は防御的な陣地帯を築くことに長けており、多くの砲兵ユニットを有していたため、それらは防御時に非常に効果的でした。正面軍が再編態勢に入ると、砲兵旅団や師団が編成されると共に射撃指揮機構を構築し、その主な防御力が砲兵の形でもたらされました。「UR」（要塞地区）と呼ばれる陣地帯を構築して、戦車／機械化軍団が休息や補給をしている間に広い範囲を守るというソ連軍の能力は、西欧の軍隊にはないものでした。「駆逐戦車」部隊（対戦車トラップやその他の防御を構築する部隊）は、あっという間に防御ゾーンを作り上げました。砲兵、迫撃砲、機関銃が連携した射撃ゾーンは枢軸軍にとって突破することが困難であり、その防衛地帯は放置される傾向にありました。再編態勢への突然の切り替えは、古代ローマ軍が每晚陣地を作るようなものだと考えて下さい。OCSシステム上では、このような能力を提供する数多くの後方ユニット（工兵、兵站など）は最低限しか表現されていません。その代わりに、それらは再編態勢の防御上の利点に

組み込まれています。

**架橋工兵ユニット** 枢軸軍プレイヤーは架橋工兵ユニットを軍集団で1つしか持っていないませんが、これはこの時点でその重装備の多くがバンター線や大西洋の壁のような防御的要塞の建設のために後退していたからでした。ソ連軍は架橋や渡し船などの活動のために多くの支援部隊を持っており、それらは橋梁／渡し船マーカーで表現されています。これらのユニットは、5マイルのヘクス内で複数の活動を行うことができます。ドニエプル川はこの地域では曲がりくねっており、幅は広いけれども深さはそれほどではなく、ヴォルガ川やライン川ほど流れも速くありませんでした。そのため、いくつかの重要な渡河地点に集中せずとも、広い範囲で橋梁／渡し船の活動を行うことができたのでした。

**Rumania か Romania か？** 1970年代頃から、英語圏ではRumaniaという表記からRomaniaという表記へと移行しました。我々は時代感を出すために「u」の表記としました。

**史実の戦況図にあるこの第〇〇師団はどこにある？** このキャンペーンの期間中、史実で部隊が頻繁にマップ上に入ったり出たりしていたことに対応するのは、デザイン上の大きな課題でした。いくつかの部隊は、ゲームのマップ上から入ったり出たりを何度も繰り返してすらいたのです。両陣営において自走砲や突撃砲の部隊は、独立部隊と戦車／機械化軍団あるいは装甲／装甲擲弾兵師団との間で何度も何度も配置換えされていました。私たちは個々の部隊の異動についての膨大なリストを作成することはせず、代わりに全体的な戦力構成と主な退出／増援に焦点をあてることにしました。そのため、あるシナリオではいくつかのユニットが史実と違うものになっているかもしれないが、全体の戦力は正確に再現されています。

**テストプレイヤー** アントニー・バーケット、ジョン・キスナー、カーティス・ベア、そして『サード・ウィンター』を市場に送り出すために一役買ってくれた献身的なテストプレイヤーの皆さんと一緒に仕事できたことを大変嬉しく思っています。特にマーカス・ランダル、マーク・ファ

ザカーリー、トーマス・ベットナー、ロイ・レーンは何年にもわたって積極的かつ熱心にプレイしてくれました。

## ヒストリカルノート

By チップ・サルツマン

『サード・ウィンター』は、1943年9月から1944年4月までのウクライナにおける重要なキャンペーンを扱っています。この一連の戦闘には、ソ連軍の75%、ドイツ軍の85%の機甲および機械化部隊、60個近くの装甲／装甲擲弾兵師団が投入されました。このキャンペーンはここまでに行われた最大の激戦であり、『サード・ウィンター』は下記のような大きな戦いを包含しています：キエフの戦い、マンシュタインの「火消し部隊」の冬の反撃、キロヴォグラードでの戦車戦、コルスン＝チェルカッシー包囲戦、第1装甲軍の脱出（フーベ包囲戦としても知られる）、1944年春のタルノーポリ周辺での要塞戦、第2SS装甲軍団の厳しい試練、ルーマニアでの激戦。春の泥濘の季節に『サード・ウィンター』は終わりを告げ、その頃には両軍ともに疲弊しきっていました。いや、ドイツ国防軍の方は絶望的であったとも言えるでしょう。

### ソ連軍と枢軸軍

このキャンペーンの期間中、ソ連軍は4つの正面軍司令部を通して軍を管理していました。スタッフカが正面軍に攻勢を命令し、それはOCSのタイムスケールでおおよそ2～12ターン続くものでした。この方法はある程度の戦術的奇襲をもたらしたものの、それよりも重要なのはドイツ軍の防御線のバランスを崩し続けることだったと、アール・F・ジームケ【アメリカの軍事史家で『Moscow to Berlin: The German Defeat in the East』の著者】は述べています。「ソ連軍は、複数の攻勢による大きな波及効果を利用し、ある場所で食い止められると攻勢軸を他の場所に移し、側面に攻勢の重心を移すようにしていたのだ」。そしてどの攻勢も「狭正面に、特に砲兵を中心として圧倒的な戦力を集中するというパターンを繰り返した」のです。一つの攻勢が終わると、その正面軍は防御態勢に移行し、部隊の再建や補給物資の補充、次の攻勢の

準備などを行ったのでした。

戦争のこの段階のソ連軍は縦深攻撃能力を成長させている途中で、それは1944年夏に完璧なものになり、1980年代までソ連軍の主要な軍事ドクトリンであり続けました。1943年後半の時点では、ドイツ軍の装甲師団に比べれば、戦車軍団や機械化軍団で突破口を開くのはまだ困難でした。しかし、彼らは砲兵の運用において新たな段階に達していたのです。大砲を集中させた砲兵師団が初めて登場し、その砲撃の継続時間と叩き込む砲弾量は、ソ連軍が今や防御陣地を叩き潰して戦車と歩兵の通過を容易にし得るなだけの大砲と弾薬を持っていることを示していました。なお、このキャンペーンに参加した4つの正面軍はすべて、1943年10月20日に名称が変更されたのですが、我々は便宜上、新しい名称をずっと使うようにしました。

- ・ **第1ウクライナ正面軍** 旧名はヴォロネジ正面軍。この正面軍はニコライ・F・ヴァトゥーチン将軍が指揮していたのですが、彼は1944年2月にウクライナ蜂起軍の待ち伏せを受けて致命傷を負ってしまいます。偶然にも、ヴァトゥーチンの2人の兄弟も1944年の2月から3月にかけて戦死しました。彼の後任にはゲオルギー・K・ジュコフ元帥が（臨時に）就任しました。第1ウクライナ正面軍の政治委員はニキータ・フルシチョフで、第18軍の政治委員はフルシチョフが後援者であったレオニード・ブレジネフであり、両名共に戦後のソ連の指導者となりました。
- ・ **第2ウクライナ正面軍** 旧名はステップ正面軍。指揮官はイワン・コーネフ将軍でした（1943年7月から1944年5月。1944年に2月にソヴィエト連邦元帥に昇進）。
- ・ **第3ウクライナ正面軍** 旧名は南西正面軍。指揮官はロディオフ・マリノフスキー将軍で、彼は後に元帥に昇進し、1950年代後半から1960年代にかけてソ連の国防大臣を務めました。
- ・ **第4ウクライナ正面軍** 旧名は南部正面軍。指揮官はフョードル・トルブーヒン将軍。1944年初頭、第4ウクライナ正面軍は『サード・ウィンター』のマップエリアから南下し、クリミアの解放に当たりました。

このキャンペーンは、休息済みの完全戦力の部隊によって始まるものではありません。双方ともが夏の間戦い続けており、多くの部隊が大きな損害を被っていました。しかし『サード・ウィンター』のソ連軍は、師団構造が崩壊し始めているドイツ国防軍と戦いながら、これまで以上に速いテンポで作戦を行っていく能力を高めていくのです。プリット・バター【イギリスの作家で『Retribution, The Soviet Reconquest of Central Ukraine, 1943』の著者】は次のように述べています。「戦争中の赤軍の学習能力と改善能力は、ドイツ国防軍のそれと対照的であった。ソ連軍のドクトリン、訓練、それに計画立案は常に過去の成功と失敗から学ぼうとしており、その結果パフォーマンスは着実に向上していた。対照的にドイツ軍の公式ドクトリンはほとんど変化せず、出来事を評価してそこから学ぶ姿勢がほとんど見られなかった。それゆえ変化する状況への適応は、現場での取り決めの変更や、減少しつつある戦闘経験豊富な将校や下士官らの経験に基づいたものの方が多かった。ドイツ軍の部隊編成における唯一の重要な新機軸は、独立ティーガー大隊、いくつかの独立パンター大隊、そして新たに砲兵師団などが創設されたというものであった。ティーガー大隊は多くの場所でその強さを発揮したものの、パンター大隊は既存の装甲師団を強化するために使用の方がほぼ間違いなく良かっただろうし、砲兵師団は期待外れだった。」『サード・ウィンター』の戦域で編成されたのは第18砲兵師団だけでしたが、存在していた期間は非常に短いものでした。

1943年における最も重要な瞬間のうちの一つは、ハリコフを攻略した後はどうするかをスターリンが決定した時でした。ジュコフ元帥は、ドニエプル川への進撃を開始する前にいったん停止して再編成を行いたいと考えていました。ところがスターリンは、ドイツ軍がインフラを破壊するのを防ぎ、またドイツ国防軍に休息の機会を与えないようにするためにすぐに進撃を開始することを望んでいました。この決断の結果、赤軍は多大な犠牲を払ったものの、血みどろの正面攻撃によってドイツ軍はドニエプル川を越えて後退したのです。ドイツ軍はこのキャンペーン中ずっと、複数の脅威にさらされ続け、不十分な資源で何とかやりくりすることを余儀なくされたのです。

『サード・ウィンター』における枢軸軍の主要な部隊は以下のものです：

- ・ **南方軍集団** エーリヒ・フォン・マンシュタイン元帥。マンシュタインは、この戦争で最も有能なドイツ軍指揮官の一人だとみなされています。彼は1944年3月にヒトラーによって解任されるまで、このキャンペーン中ずっと南方軍集団を指揮していました。彼の回想録である『失われた勝利』（1955年）では、ヒトラーの指導を強く批判し、この戦争の軍事的側面のみを扱い、政治的イデオロギーや行動の善悪の問題は無視されています。マンシュタインはドイツ軍の元帥の中で最も長生きして1973年にミュンヘン近郊で亡くなりました。
- ・ **第4装甲軍** ヘルマン・ホート（1943年11月末まで）、次いでエアハルト・ラウス。戦後、ラウスは東部戦線でドイツ軍が使用した戦車戦術の分析を中心に、多くの書籍や出版物を執筆・共同執筆しました。
- ・ **第1装甲軍** エバーハルト・フォン・マッケンゼン（1943年10月末まで）、次いでハンス＝ファレンティーン・フーベ。マッケンゼンの部隊は1941年のバルバロッサ作戦でキエフに最初に到達し、2年後にはキエフを守ることになりました。フーベは、ソ連軍がキエフに迫ってきた時にマッケンゼンから交代し、この『サード・ウィンター』のキャンペーンの残りの期間のほとんどで第1装甲軍を指揮しました。フーベは「フーベ包囲戦」とも呼ばれるカメニェツ・ポドリシキー包囲戦で自軍の脱出を指揮します。1944年4月、フーベはヒトラーから勲章を授与されるためにドイツに召還され、前線に戻る途中、飛行機事故で死亡しました。
- ・ **第8軍** オットー・ヴェーラー。第8軍はこのキャンペーンの開始時にはキロヴォグラードの周辺にあり、最終的にはハンガリーへと撤退しました。ヴェーラーは戦犯として6年間服役した後、1987年に92歳で亡くなるまで西ドイツに住んでいました。
- ・ **第6軍** カール＝アドルフ・ホリト上級大将。スターリングラード戦の後、再編された第6軍はニコポリ＝クリヴォイ・ローグの突出部で戦い、最終的にはルーマニアへ後退しました。ホリトは戦

争犯罪に問われ、1949年まで投獄されます。1985年に亡くなった時、ホリトは生存する最後のドイツ国防軍上級大将でした。

- ・**ルーマニア第3軍** ベトレ・ドゥミトレスク将軍。ルーマニア第3軍はスターリングラード戦の後に再編され、クリミアの北側で戦いました。
- ・**ルーマニア第4軍** イオアン・ミハイ・ラコヴィッツァ将軍。スターリングラード戦で壊滅した後に再編された軍でした。1944年春には、主にルーマニア国境の防衛戦に参加していました。ルーマニアが降伏した後、『ハンガリー・ラブソディ』で再び登場し、ソ連軍側で戦うこととなります。
- ・**ハンガリー第1軍** ナーダイ・イシュトヴァーン将軍。この軍は主に占領軍としての役割を担っていましたが、カルパチア山脈にまで戦闘が及んだため、前線の戦闘を余儀なくされました。
- ・**第4航空艦隊** オットー・デスロッフ将軍が指揮していました。

### ドニエプル川への競争

1943年7月のクルスク（マップがそこまで広がっていれば、ヘクスB63.32）での溶鉱炉内のような戦いに続いて、ソ連軍はドネツ盆地を奪還するための夏の攻勢を開始しました。1943年8月3日に開始されたこの攻勢で、ベルゴロド（1943年8月5日奪還）とハリコフ（B60.09、1943年8月21日）を制圧。南方軍集団司令官エーリヒ・フォン・マンシュタインは、ドネツ川の線を保持する（より多くの兵力が必要）か、それともドニエプル川まで撤退するかを決断を、OKHとヒトラーに突きつけました。ヒトラーは、ジームケが述べているように「どうしても避けられない以外のすべての決断を回避していた」ヒトラーは、ドニエプル川の線に沿ってキエフからザポロジェ、そしてさらに南方のメリトポリまで連なる「東方の壁」を構想していました（この線は、中央軍集団の戦域ではパンター線、南方軍集団の戦域ではヴォータン線と呼ばれていました）。しかし、ヒトラーがこの位置への「原則的な」撤退を許可したのは、前線の形を維持するための絶望的な反撃が1ヶ月続けられた後の9月8日のことでした。

その後、枢軸軍は5つの主要な渡河地点（キエフ、カニェフ、チェルカシー、ク

レメンチュグ、ドニエプロペトロフスク）でドニエプル川を渡るための撤退戦を繰り返します。彼らはソ連軍部隊から離脱し、巨大な水の壁を越え、しかる後に川の線を守るため、散開しなければならなかったのです。2ヶ月半の間に、ソ連軍のこの夏の攻勢は枢軸軍を150マイル後退させました。『サード・ウィンター』は、疲弊しきった両軍がドニエプル川に到着しつつあった1943年9月26日に始まります。ソ連軍の最初の橋頭堡は9月22日にドニエプル川とプリピャチ川の合流点（ヘクスB6.32）に築かれ、9月24～25日の夜には空挺部隊を使ってカニェフ（B12.12）で、2つ目の橋頭堡を占領します。

ロシアで2番目に大きな川であるドニエプル川は、ロシア西部で最も強固な自然障壁となっていて、特に西側から守る際に重要な存在でした。本流の幅は3分の1マイルから1マイル【約1.6km】以上まで様々で、周辺の陸地は広い範囲で湿地になっています。西岸の急峻な崖はキエフ付近で300フィート【約91m】近くにまで高くなっており、その下流の大部分に沿って高台が続いていました。東岸は平坦で木が生えておらず、裸の草原が地平線まで続いています。陣地化され、十分な人員が配置されていれば、ドニエプル川の線はほぼ理想的な防衛線となっていたでしょう。しかし、1943年秋の南方軍集団の状況は、ドニエプル川がささやかな自然障害にしかならず、そこにつかまることもできないほどのものでした。パッターはこう述べています。「ドイツ軍の退却は大きな困難に直面しながらも非常に巧みに行われ、追いかけてきたソ連軍がこの大河の東側で大部隊を捕捉する機会はほとんどなかった。しかし、ドイツ軍が西岸に渡って、自分達のための陣地がほとんど用意されていないことに気付いた時、兵士達の間には失望が広がった。」

ドニエプル川の線を守ることは、軍事的にだけではなく、政治的、経済的にも重要でした。ヒトラーは、ソ連軍をウクライナでストップさせることで、ルーマニア、ハンガリー、ブルガリアがドイツの軍事的、政治的な同盟国から離脱するのを防ぎたいと考えていたのです。また、ウクライナを支配していれば、その食糧や重要な戦略的資源をドイツに運ぶことができました。頑強な防衛を行う上で、ドイツ軍は豊富な食糧供給源であるウクライナ西部とクリミア、ニコポリ（D35.13）周辺のマンガン

産出地、クリヴォイ・ローグ周辺の鉄鉱石産出地、ケルチ、それに一級の港湾を持つ黒海沿岸の保持を特に重視していました。

### ドニエプル川を巡る戦い

ソ連軍もまた、ドニエプル川を一刻も早く渡り、ドイツ軍が陣地を構築して膠着状態に陥ってしまうのを何とか防ごうとしました。ソ連兵達は水に浮くあらゆるもの——木材、ガソリンを入れるドラム缶、木製のドア、布で巻いたわら束まで——を使って渡ろうとしました。一方工兵達は、重機のために土手道を作りました。これらの方法は粗雑なものであったものの「あまりにも大規模かつ執拗に行われたため、圧倒的な効果を発揮した」。9月末までに西岸に23の橋頭堡が作られました（ゲーム上で表現するには小さすぎるものも含めて）。ドイツ軍はほぼすべての橋頭堡に大規模な反撃を開始し、重装備が川を越えて輸送される前に全滅させようとした。

ソ連軍は10月2日にドイツ軍が保持しようとしていた線に到達したことから、1週間（10月1日～8日）攻撃を中止し、再編成と新しい部隊の前線への移動を行います。第4ウクライナ正面軍は10月の大半を費やしてザポロジェ（D45.15）を守るドイツ軍部隊を叩き、10月15日までに枢軸軍を川の向こう側に追いやりました。同時期、第4ウクライナ正面軍の部隊はメリトポリ（D44.01）にも向かっており、そこで10月23日まで戦闘が続きます。ドイツ軍の戦線が破れると、第4ウクライナ正面軍は11月5日までにドニエプル川下流域に進撃してクリミア（マップ外南方）を孤立させ、残っているドイツ軍唯一のドニエプル川東岸の橋頭堡はニコポリ（D35.13）周辺のものだけになりました。

第2ウクライナ正面軍はいくつかの橋頭堡を持っていましたが、コーネフは10月中旬、ミシュリン・ローグ（D33.31付近）からキロヴォグラード（D16.28、現在のクロピウヌィーツィクィイ）とクリヴォイ・ローグ（D25.19）に向かう経路に努力を集中しました。マンシュタインはこれを最も重大な脅威と判断し、西方から新たに到着した第1SS装甲師団と第1装甲師団を含む装甲／装甲擲弾兵師団群をこの混戦に投入します。状況は、マリノフスキーの第3ウクライナ正面軍がベルクノドネプロフスク（D37.28付近）でドニエプル川を越え、10月26日までにドニエプロゼルジ

ンスク (D39.26) とドニエプロペトロフスク (D44.23) を占領したことで、さらに複雑になっていました。マリノフスキーはその後、第2ウクライナ正面軍と戦う枢軸軍の側面を突くために部隊を南西に向かわせませす。しかし、物資の不足とぬかるみに阻まれ、どちらの正面軍もキロヴォグラードとクリヴォイ・ログを攻略できず、膠着状態に陥ってしまいました。彼らは消耗した部隊を再建し、物資を再集積するため守勢に転換しました。枢軸軍が成功を取めたのは到着したばかりの完全戦力の装甲／装甲擲弾兵部隊群があったからでしたが、これらの部隊のための十分な補充はありませんでした。キエフ周辺の状況が直後に悪化したため、彼らはほとんど休むことができませんでした。

ヴァトゥーチンの第1ウクライナ正面軍は9月末にブクリン彎曲部 (B11.16 付近) を占領し、カニェフ付近で最初にして最大の橋頭堡を獲得していました。枢軸軍はこの地域に第24装甲軍団を急行させ、橋頭堡を封じ込めようとしています。ソ連軍はブクリン彎曲部に6つの戦車／機械化軍団と14の狙撃兵師団を詰め込み、それに対抗したのは3つの装甲師団、2つの装甲擲弾兵師団、2つの歩兵師団でした。このような大軍に補給を供給し続けるのは困難で、また枢軸軍の頑強な抵抗もあって、10月12日と10月21日の攻勢はいずれも数日間の不毛な攻撃の後、失敗に終わります。しかしこれらの攻撃はドイツ軍を拘束し、またソ連軍は失われた装備を容易に補充できました。スターリン（そしてヴァトゥーチン）の関心は、キエフ (B4.24) のすぐ北にあるリュテシ (B5.26 付近) の小さな橋頭堡に向けられました。

リュテシでは、ソ連軍はその橋頭堡に複数の狙撃兵師団と第5親衛戦車軍団を詰め込みました。10月下旬にヴァトゥーチンは、パーヴェル・ルイバルコが指揮する第3戦車軍全体をブクリン彎曲部からリュテシ地区へと再配置します。これは、泥濘ばかりの地面という困難を克服して行われた、並外れた成果でした。ソ連軍の準備もかなりのもので、26本の橋と87隻の渡し船が設置されました。ソ連軍の橋の多くは水中に架けられており、発見も困難でした。ドイツ軍には、予期されるソ連軍の攻撃が最初から遠大な目的を持っているのか、それとも単に初期の橋頭堡を獲得して後で利用するだけのものなのか、判断でき

ませんでした。

しかし彼らはすぐに、それがどちらであるかを知ることになりました。ソ連軍は11月3日に大規模な砲撃と攻撃を開始し、11月4日には第3戦車軍が突破し、ドイツ第7軍団をキエフから後退させたのです。ソ連軍は11月6日にキエフを占領しました。第1ウクライナ正面軍はこの橋頭堡から爆発的に打って出ました。11月7日までにソ連軍の先鋒は、キエフの南西50kmにあるファストフ (A60.19) の重要な鉄道結節点に到達していました。11月12日にはジトーミル (A48.24)、11月17日にはコロステニ (A50.34) が占領されます。10日間でソ連軍は150km前進し、中央軍集団と南方軍集団の間に巨大な空隙ができました。

第4装甲軍は深刻な状態にありました。しかし、ヘルマン・バルクの第48装甲軍団 (第1SS装甲師団、第1装甲師団、第7装甲師団からなる) の到着で状況は一変します。マンシュタインは、11月中旬に反撃を開始しました。バルクは自分の部隊を北のブルシリフ (A58.25 付近) まで進ませ、その後西へ転進してジトーミルを奪還します。ルイバルコはドイツ軍の攻撃に対抗するため、第7親衛戦車軍を送り込みました。大規模な戦車戦が繰り広げられ、それは11月後半まで続きましたが、秋の泥濘ですべての作戦が停止しました。12月5日までに泥が凍結し、第48装甲軍団はジトーミルの北側を広範囲に攻撃しました。赤軍の意表を突き、ドイツ軍はソ連軍の第60軍を包囲しようとしていました。第2降下猟兵師団を増援として得たドイツ軍は、東へ進撃し、ソ連軍を守勢に立たせませす。ファストフさえもが脅かされ、第60軍はコロステニから撤退しました。ヴァトゥーチンはスタフカへ予備の投入を要請せざるを得なくなり、第1戦車軍と第18軍が送られてきました。これらの新たな部隊は、他の戦区から回されてきた追加の軍団と共に急いで西に進軍しました。12月初旬のピーク時には、第1ウクライナ正面軍は狙撃兵師団を66、騎兵師団を3つ、戦車・機械化軍団を8つ持っていました。こうして赤軍はドイツ軍の進撃を阻止し、再び攻勢に転じてブルシリフを奪還したのです。12月下旬には両軍ともに疲弊きっていました。第1ウクライナ正面軍は増援を受けつつあり、次の行動を計画し始めていました。

一方コーネフは、11月14日に第2ウクライナ正面軍とともに新たな攻勢を開始しました。泥濘とドイツ軍に阻まれながらも、12月14日にチェルカッシー (B18.07) が陥落し、ドニエプル川を越えての攻撃と上流への進撃により、橋頭堡が大きく拡大します。しかし彼らはクリヴォイ・ログやキロヴォグラードには到達できず、スタフカは12月20日に第2ウクライナ正面軍に活動停止を命じました。第4ウクライナ正面軍は12月中、ニコポリ橋頭堡に何度も攻撃を行ったものの、大きな成果は得られませんでした。

### ドニエプル川からカルパチア山脈へ

1944年が近づくとつれ、ドニエプル川の線はジョン・エリクソン【イギリスの歴史家で『The Road to Berlin: Stalin's War with Germany』の著者】が述べるように「今やひび割れ、もみくちゃになってしまっていた」ものの、依然としてドイツ軍が保持していました。エーリヒ・フォン・マンシュタインとエヴァルト・フォン・クライスト (A軍集団司令官) の両名は、部隊をより防衛しやすい場所へ撤退させて欲しいと要請します。しかしヒトラーはこの要請を却下し、軍をその場に留めるように命じました。ヒトラーの命令にもかかわらず、ドイツ軍部隊は命令をまったく無視したり、自分達の行動を正当化するための架空の報告書を提出したりして撤退しました。そして時間と資材が許す限り、防衛線の準備を整えたのです。この時点で、ドイツ軍、ルーマニア軍、ハンガリー軍を含む南方軍集団は、計93個師団 (18個装甲師団と4個装甲擲弾兵師団を含む)、2つの自動車化歩兵旅団、ティーガー戦車を装備する3つの重戦車大隊、18個の突撃砲旅団、いくつかの対戦車大隊、そして多くの砲兵、建設部隊、工兵、その他の部隊を有していました。このウクライナの戦いに、約2,000輦の作戦車輛のうち約1,000輦が配置されていました。これは東部戦線にいるドイツ軍全体の40%で、装甲師団だけで見れば72%に相当する兵力でした。

スタフカは冬の間に、ソ連人が「右岸」と呼ぶウクライナに兵士と戦車を雪崩れ込ませ、ドイツ軍の戦線を粉砕することを計画していました。1944年1月初めの時点で、第1、第2、第3、第4ウクライナ正面軍は合計21個の諸兵科連合軍、3個戦車軍、4個航空軍を擁し、狙撃兵師団は

169 個、騎兵師団は 9 個、戦車・機械化軍団は 18 個、大砲・迫撃砲は 31,000 門、戦車約 2,000 輛、戦闘機 2,300 機以上という規模でした。枢軸軍に雪崩のように降りかかったのは、複数の別々の攻勢作戦だったのです。

#### ジトーミル＝ベルディチョフ作戦

ヴァトゥーチンの第 1 ウクライナ正面軍は 12 月 24 日に次の作戦を開始し、キエフの西と南西にいたドイツ第 4 装甲軍を攻撃しました。この攻撃は、南方軍集団にとって最も危険な場所である北側面に加えられたものでした。というのは、主力部隊がドイツ本国に通じる鉄道線から切り離されてしまう恐れがあったからです。マンシュタインは第 4 装甲軍による側面攻撃でこの攻勢に対抗しようとする共に、援軍と撤退による戦線縮小の許可を求めました。12 月 27 日、マンシュタインはヒトラーに部隊撤退の許可を求めましたが、この時も踏みとどまるよう命じられます。

ヴァトゥーチンの攻勢は西に向かって進み、重要な地点を占領していきました。12 月 29 日にはコロステニ (A50.34) が陥落し、12 月 31 日にはジトーミル (A48.24) が続きました。1 月 6 日頃にはノヴォグラード・ヴォリンスキー (A39.32) とベルディチョフ (A45.20) を占領。50～125 マイル【約 80～200km】の深さまで前進した第 1 ウクライナ正面軍は、キエフとジトーミル地域からドイツ軍をほぼ完全に排除して、ドイツ軍の戦線に大きな穴を開けました（その中にはジトーミル周辺の 35 マイル【約 56km】幅のものもありました）。防御線の穴を塞ぎ、この地域でのソ連軍の攻勢を阻止するため、マンシュタインは第 1 装甲軍の 12 個師団をウクライナ南部からこの地域に移しました。しかしこれで予備がほとんどなくなってしまったため、その後の作戦展開に影響が出てくることになってしまいます。この後も続いたソ連軍の攻勢作戦に対処するため、ドイツ軍司令部は西ヨーロッパだけでなく、ルーマニア、ハンガリー、ユーゴスラビアからも部隊を移送せざるを得ませんでした。

#### キロヴォグラード作戦

続いてコーネフの第 2 ウクライナ正面軍は 1 月 5 日、キロヴォグラード作戦を開始して戦いに参加しました。その最初の成果のうちの一つは、第 4 装甲軍の援軍に駆け

つけようとしていた第 3 装甲軍団を阻止したことであり、第 4 装甲軍はジトーミル＝ベルディチョフ作戦中の第 1 正面軍によって攻撃を受けることになりました。この時マンシュタインは東プロイセンのヒトラーの司令部に飛んで撤退の許可を求めたものの、再び拒否されます。

キロヴォグラード作戦は、ドイツ軍をドニエプル川から 25～30 マイル【約 40～48km】後退させました。この作戦の最大の成果は、主要な拠点であり、重要な道路の結節点でもあるキロヴォグラード (D16.28) を解放し、ドイツ第 8 軍の防衛態勢を不安定化させたことでした。またキロヴォグラードを攻略することで、コルスン＝シェフチェンコフスキー (B9.09) 周辺のドイツ軍の側面を南から脅かすことができるようになりました。さらに、キロヴォグラード作戦と、隣接するジトーミル＝ベルディチョフ作戦は、カニェフ付近のドニエプル川沿いに残っていた少数のドイツ軍部隊の周りに突出部を形成し、その後のコルスン＝シェフチェンコフスキー作戦のための条件を整えたのでした。

#### コルスン＝シェフチェンコフスキー作戦

雪解けが進み、非常にぬかるんだ地面が両軍を悩ませる中、第 2 ウクライナ正面軍は 1 月 24 日、伝統的な激しい砲撃に続いてコルスン突出部の南側を攻撃しました。彼らはそこを突破し、ドイツ軍の反撃を簡単に撃退します。その 2 日後、第 1 ウクライナ正面軍は北から第 6 親衛戦車軍を送り込み、南から進出してきた部隊と 1 月 28 日に合流して包囲環を形成しました。戦闘の激しさから「リトル・スターリングラード」と呼ばれたこの包囲環の中に、コルスン周辺にいた第 11、第 42 軍団のドイツ軍約 6 万人を孤立させたのです。2 月 4 日、マンシュタインはハンス・フーベが指揮する第 1 装甲軍（第 47 装甲軍団と第 3 装甲軍団を持つ）を救援に向かわせます。第 47 装甲軍団は南東から、第 3 装甲軍団は西から攻撃を開始しましたが、どちらの攻撃も行き詰まってしまいました。ジューコフは 2 月 8 日、包囲環に閉じ込められた部隊に降伏勧告をしましたが、拒絶されます。激しい消耗戦の末に、最終的に第 3 装甲軍団は閉じ込められた部隊に近いリシャンカ (B4.06) に到達することができ、包囲環内のドイツ軍部隊は脱出を試みます。負傷者や重装備を放棄して大きな損失を出しな

がらも、約半数が脱出に成功します。物資が不足し、空爆と前進してくるソ連軍地上部隊に苦しめられていた包囲環内の最高司令官であったヴィルヘルム・シュテンマーマンは、2 月 16 日から 17 日の夜に最後の脱出を試みました。ソ連軍は約 15,000 人の捕虜を獲得し、シュテンマーマンを含む少なくとも 10,000 人のドイツ兵を戦死させました。この戦いの最中には非常に残酷な行為が数多く行われました。ロシア人捕虜がドイツ軍の撤退時に射殺されたり、また手を上げて降伏しようとしたドイツ軍兵士をソ連軍騎兵に虐殺させたことをコーネフが後に認めていたりするのです。

#### ロヴノ＝ルーツク作戦

ヴァトゥーチンの軍は右側面からの攻撃を続け、ロヴノ＝ルーツク作戦によって重要な補給拠点であるリヴォフとタルノーポリへと接近し、南方軍集団と中央軍集団との間に 110 マイル【約 177km】に及ぶギャップを作り出しました。ロヴノ（現在のリヴネ、A25.35）とルーツク（マップ北端外で、A17.37 に当たる場所）は 2 月 2 日に両方とも占領されました。第 1 ウクライナ正面軍の攻勢は非常に成功したものの、戦線は 300 マイル【約 483km】（50 ヘクス）にも広がり、燃料や弾薬が不足していました。

#### ニコポリ＝クリヴォイ・ローグ作戦

それまで何度かニコポリ攻略に失敗していた第 3 ウクライナ正面軍は、1 月 30 日にドニエプル川の北側から攻撃を開始し、その南にいた第 4 ウクライナ正面軍の部隊も翌日に合流しました。ソ連軍は第 6 軍の戦線を突破し、2 月 5 日にアポストロヴォ (D28.15) を占領して大打撃を与えました。ニコポリ (D35.13) は 2 月 8 日に陥落しましたが、この橋頭堡にいた第 4 軍団を含むドイツ軍部隊は大きな損害を受けたにもかかわらず、ドニエプル川を越えて退却することができました。第 4 軍団はこの頃、アポストロヴォへの反撃に失敗し、その結果、ソ連軍はこの突出部の北西にあるクリヴォイ・ローグ (D25.19) への進撃を準備するため、一時的に停止しました。第 3 ウクライナ正面軍の 2 個軍は 2 月 17 日にクリヴォイ・ローグへの進撃を開始し、2 月 22 日に占領しました。その後、第 3 ウクライナ正面軍の他の軍が進撃を再開し、次のドイツ軍の防衛線となるインフレッツ川

(D27.30 から D17.04 まで) を何カ所かで渡って橋頭堡を確保しました。この地域での戦闘は終了し、ついにソ連軍のドニエプルからカルパチア山脈への攻勢の第2段階への道が開かれたのでした。

2月下旬になって攻勢が弱まってきたと思いきや、ソ連軍はさらに大規模な第二段階の攻勢の準備を進めていたのです。

#### ウーマニ=ボドシャニー作戦

このキャンペーンの動きは非常に速くなりつつありました。3月5日、コーネフの第2ウクライナ正面軍はウーマニ=ボドシャニー作戦を開始し、急速に前進しました。3月10日、第2ウクライナ正面軍はウーマニを陥落させ、2つのドイツ装甲軍団を捉えて壊滅させたのです。

#### カメニツ=ボドリスキー包囲戦(フーベ包囲戦)

これは、ドニエプル川からカルパチア山脈への攻勢における、ソ連軍の最大にして最重要の戦いでした。東部戦線のための司令部である OKH は、2月末にソ連軍の動きが鈍ったことから、この方面でこれ以上の攻勢はもうないと考えていました。ところが、ソ連軍はウクライナにいた6つの戦車軍のすべてを投入して、さらに大規模な攻勢をかける準備を密かに進めていたのです。ソ連軍の欺瞞策は功を奏し、3月4日に第1ウクライナ正面軍(ヴァトゥーチンが致命傷を負った後、ジュコフ元帥が指揮していました)が猛烈な砲撃を伴うプロスクーフ=チェルノフツィー作戦を開始した時、ほとんどのドイツ軍指揮官は驚愕しました。地面が非常にぬかるんでいたため、防御側のドイツ軍は機動力を維持することが困難でしたが、ソ連軍は泥濘でも進みやすい履帯を履いた戦車やトラックを十分に供給していたため、優位に立つことができたのです。

#### ベレスネーコヴァチア=スニグレフカ作戦

マリノフスキーの第3ウクライナ正面軍は翌日、ベレスネーコヴァチア=スニグレフカ作戦を開始し、トルブーヒンの第4ウクライナ正面軍はクリミアへの攻勢準備を開始するために離脱しました(1944年4月から5月にかけてのクリミア攻勢で、ドイツ第17軍が崩壊し、ドイツ軍5個師団とルーマニア軍7個師団が壊滅しました)。ソ連軍の戦線は急速に前進し、コーネフの第2ウクライナ正面軍は3月23日にチェ

ルトコフ(A13.15)を占領し、第1装甲軍の撤退を阻止します。第1装甲軍はこの時ハンス・フーベが指揮していたのですが、3月28日までに完全に包囲されてしまったのです。包囲環が形成されるとエーリヒ・フォン・マンシュタインはヒトラーの司令部に飛び、包囲環内のすべての部隊がその場で「要塞」を形成することを要求した指令を撤回するように求めました。彼の説得は成功し、第2SS装甲軍団を増援として受け取ります。これは、ヒトラーの総統指令51号によって西部戦線を犠牲にして東部戦線に戦力を移す初めての試みでした。3月30日、フーベの部隊は包囲環の中から脱出するための攻撃を開始しましたが、ソ連軍の軍事情報部が第2装甲軍団の到着を掴んでいなかったことと、脱出がソ連軍司令部が予想していた南方ではなく西方に対して行われたため、成功しました。4月10日に、フーベの部隊は第4装甲軍と合流を果たしたのです。この小さな成功にもかかわらずヒトラーはソ連軍の戦略的成功の責任を将軍達に求め、南方軍集団とA軍集団の司令官(フォン・マンシュタインとフォン・クライスト)を解任しました。ウクライナを奪還する意図を示すために南方軍集団とA軍集団はそれぞれ北ウクライナ軍集団と南ウクライナ軍集団と改名され、後任の司令官にはヴァルター・モデルとフェルディナント・シェルナーが任命されたのでした。

#### ポレスコ工戦

一方、南方では、第3ウクライナ正面軍がオデッサ(C55.05)と、ルーマニアが統治するトランスニストリアへと進撃していました。先鋒の第8親衛軍は3日間の激戦でわずか5マイル(約8km)しか進めなかったものの、ホリトの第6軍の防衛線を破り、その後ノヴィー・ブーク(D16.17)に向かって25マイル(約40km)も前進し、守備隊をほぼ包囲したのです。ヒトラーの退却禁止命令にもかかわらず、ドイツ軍は3月11日までにブーク川(A39.10からD8.08)まで後退しました。その同じ日、主としてマリノフスキーがニコライエフ(D8.08)で部隊を分割していたことから、ホリトは包囲環から抜け出すことに成功し、3月21日までにブーク川に即席の防衛線を敷くことができました。しかし彼はヒトラーの信認を失って解任され、マクシミリアン・デ・アンゲリスが後任となりま

した。3月28日、防衛線が全線にわたって激しい攻撃を受け、ドイツ軍はブーク川から撤退を開始しました。

#### オデッサ作戦

3月25日までにブルト川(A10.06~C25.01)を突破し、オデッサを確保するために第3ウクライナ正面軍が派遣されました。4月2日、チュイコフの第8親衛軍と第46軍は吹雪の中を進撃し、4月6日までに枢軸軍の戦線をドネストル川の向こうへと追いやって、オデッサ(C55.05)を孤立させました。4月10日にオデッサは降伏し、ソ連軍はルーマニアの領土に入り始めました。

#### キャンペーンの完了

南方軍集団とA軍集団が敗北し、ウクライナ右岸とクリミアからドイツ軍が一掃されたことで、戦略的状況は激変しました。赤軍が南方軍集団の主な補給線であるリヴォフ~オデッサ間の鉄道線を奪取しカルパチア山脈に到達したことで、南方軍集団の戦線はカルパチア山脈の南北に二分されることになりました。北部はガリシア(ポーランド)に押し戻され、南部はルーマニアに押し戻されたのです。

1944年4月5日からドイツ軍の軍集団はそれぞれ、北ウクライナ軍集団と南ウクライナ軍集団と改称されました(ただし、ドイツ軍の手中にウクライナはほとんど残ってはいませんでした)。前述の分裂の結果、この2つの新しい軍集団の繋がりは切れてしまっていました。今やドイツ軍の南方の軍集団は、バルカン半島を通る長い迂回ルートを使わなければならない、すべての物資は状態の悪いルーマニアの鉄道を使って迂回させなければなりませんでした。

この攻勢におけるソ連軍の成功は、1944年夏の一連の大攻勢への道を開くものでした。まず、ルブリン方面で中央軍集団の側面と背面を攻撃する条件が整い、これはルブリン=プレスト作戦で達成されました。第二に、リヴォフとポーランド東部に向けて攻撃する条件が整い、これはリヴォフ=サンドミエシュ作戦で達成されました。第三に、ルーマニアとバルカン半島の奥深くへの攻撃を展開する条件が整い、これはヤッシー=キシニョフ攻勢で達成されたのです。

ウクライナに展開していたドイツ軍の人

的損失は非常に大きなものでした。このキャンペーン中、歩兵師団9個と空軍野戦師団1個が壊滅し、装甲および装甲擲弾兵師団7個、空挺師団1個、歩兵師団2個が大きな損害を受けて前線から撤退し、大規模な再編成のために西方に送られました。残りのほとんどの師団も同様に大きな損害を受け、少なくとも50%の人員を失っていましたが、中には部隊の残骸だけしか残っていないものもありました。例えば、A軍集団の39個師団のうち18個師団は「カンフグルッペ（戦闘団）」に分類されていましたが、これは師団の消耗が激しく、実際には強化された連隊程度でしかなかったことを意味しているのです。

ドイツ軍のクルト・フォン・ティッペルスキルヒ将軍によれば、ウクライナ右岸におけるドイツ軍の敗北はスターリングラード以降最も重大なものだったといいます。「ドイツ軍がヴォルガ川とコーカサスから茨の道を通ってドニエプル川まで退却した時以降、これは最大の敗北であった。マンシュタインやクライストのような熟達した将軍でさえ、ドイツ軍を救うことはできなかった。」

ヒトラーが3月30日にマンシュタインとクライストを解任し、モーデルとシュルナーに交代させたことは、兵士達を徹底的に駆り立て、最後の抵抗力を引き出す将軍をヒトラーがいかにも求めていたかを物語っています。一方でこれは、ドイツ国防軍が機動力をすでに失ってしまっており、今後は征服ではなく、遅滞や妨害しかできないという暗黙の了解でもありました。南方軍集団を「北ウクライナ軍集団」、A軍集団を「南ウクライナ軍集団」と改称したことは、ソ連軍という大きな波がすでにカルパチア山脈とルーマニア国境にまで達している中の空虚なジェスチャーに過ぎませんでした。マンシュタインはこれまで常に天才的な指揮能力を発揮し、危機的状況において欠かせない存在でした。しかし大局的に見れば、彼の才能あふれる将軍としての姿がヒトラーに対して、ドイツ軍が単に逆境の時代にいるのではなく、すでに絶望の時代に突入しているという認識を持ちがたくさせていたのです。

**マップに関して：**1943 / 44年の冬から、現在は物理的にも政治的にも大きく変化しています。ソヴィエト連邦の崩壊により、ウクライナは1991年に独立国となりました。

た。『サード・ウィンター』のマップには、現在のウクライナの大部分が描かれています。ウクライナ政府はロシアとの区別をはっきりさせるため、その首都の発音を変えました。歴史的には「キーイフ」と呼ばれていましたが、現在の公式の表記は「Kyiv」で、ウクライナ語での発音は「キーイウ」に近いものになります。他にもいくつかの都市の名前が変更されています。LvovはLviv、KirovogradはKropyvnytskyi、DneprodzerzhinskはKamianske、DnepropetrovskはDniproとなっているのです。モルドバ(第二次世界大戦当時はベッサラビアと呼ばれていた地域)も1991年に独立を宣言しました。キシナウ(Chisinau：当時はキシニョフ Kishinev、C38.15)を首都とするモルドバは、ドニエストル川の西岸に沿って北に伸び、ベリツイ(Balti、C31.28)を越えてモギレフ=ポドリスク(Mogilev-Podol'skiy、A33.03)近くまで広がっています。モルドバの「分離国家」であるトランスニストリアは、ドネストル川の東岸にC47.08からC42.27の辺りに存在しています。

OCSのマップで現在のドニエプル川を表現するとすれば、ソーセージのような湖が連なっているように見えるでしょう。周期的に起こる洪水を制御するために作られたドニエプル川のダム群は、この川の大部分を1〜2ヘクス幅の貯水池に変えてしまいました。キエフ(B4.24)、カニェフ(B12.12)、クレメンチュグ(D30.34)、ドニエプロゼルジンスク(D39.26)、ザポロジェ(D44.15)、ノーヴァヤ・カホフカ(D25.04)などに大きなダムがあります。1986年に原子炉事故が発生したチェルノブイリは、ヘクスB5.34にあります。その立ち入り禁止区域は、A59.35からB6.32までと、マップの北側に広がっています。

## ゲームプレイノート

Byアントニー・パーケット

このキャンペーンは、ドイツ軍がツィタデル作戦に失敗して完全に撤退している途中の9月下旬から始まります。このOCSゲームは静かな戦線ではなく、非常に流動的な状況から始まるので、プレイヤーはセットアップによく慣れる必要があるでしょう。ドイツ軍の最初の課題は、ドニエ

プル川の大河川の部分とヴォルガ級大河川の部分の両方の橋梁を使用して、部隊をうまく西岸へ退却させることです。勝利条件を満たし、秋に枢軸軍の増援が到着して戦線を安定させるためには、この河川の線を維持しなければなりません。

ソ連軍プレイヤーは戦略上の主導権を握っているため、多くの選択肢があります。北部では、キエフの北でドニエプル川を攻略するか、あるいは空挺部隊が占領したブクリン橋頭堡を増強するか。南部では、いかにして橋梁を奪うか、あるいは架橋部隊を使ってうまくドニエプル川を渡るか？

ドイツ軍がドニエプル川の線を維持できれば、秋に強力な援軍を得て、冬にソ連軍に対抗することができるでしょう。しかし、ドイツ軍には歩兵部隊が不足しています。広大な草原で「要塞」を防波堤にすることが非常に重要です。マンシュタインによる火消し部隊を活用する方法も優れた戦術です。可能であれば、輸送トラックとSPを持つ2、3の装甲師団をグループ化するのが良いでしょう。

ソ連軍プレイヤー側は、狙撃兵師団による圧迫という方法が有効です。しっかりとした線を維持しつつ、自軍の戦車/機械化軍団と補充の多さを活用して敵の装甲部隊を消耗させます。望む場所で航空優勢を取ることができるはずですから、前進しましょう。RVGKによる補充の効率は高いので、損失を補うことができます。ただし、明確な戦略を持ってすべての正面軍を活用するようにして下さい。そうしなければ、装甲部隊はあなたを足止めしてしまうかもしれません。

## ゲームプレイノート

Byチップ・サルツマン

### ソ連軍プレイヤー

おめでとうございます、同志！ ソ連の指導者にとって最高の名誉の一つを与えられました。祖国からナチスの侵略者を排除するために、1つ(または複数)のソ連軍正面軍の指揮を執ることを命じられたのです。しかし、同志スターリンは結果を求めており、遅れを嫌っておられます。

### ドニエプル川の渡河

『サード・ウィンター』のキャンペーンは1943年9月26日、戦史上「ドニエ

ル川の戦い」とされる戦いが始まってから約1ヶ月後に開始されます。ヒトラーは1943年9月15日、南方軍集団にドニエプルの線までの撤退命令を出していました。ゲーム開始時点では、ドイツ軍はまだボルタヴァ (B41.06/42.06) を占領しており、カニェフへの空挺降下が行われて(9月23日) 混乱している真っ最中です。ソ連軍の部隊はドニエプル川に近づきつつあり、いくつかの橋頭堡を築いています。

ソ連軍には史実と同じ選択肢がありません。ジュコーフ元帥とA.I. アントノフ参謀次長は、時間をかけてソ連軍を再編成し、ドイツ軍の弱点を1、2ヶ所見つけてそれを利用し、本格的な渡河作戦を行った後に縦深作戦を展開することを勧めました。スターリンはドイツ軍に準備の時間を与えずに、戦線全体にわたって一刻の猶予も置かずに渡河を試みることを望みましたが、これでは死傷者が多くなることでしょう。

計画を立てる際に考慮すべきことがあります：

- 踏切台が絶対に必要です。その候補は8つあります。キエフ (B5.24)、カニェフ (B12.12)、チェルカッシー (B17.08)、クレメンチュグ (D28.34 & D30.34)、ドニエプロペトロフスク (D44.23)、サポロジェ (D43.15)、ヘルソン (D14.03) です。2つを除き、ドニエプル川を渡るだけでなく、大都市ヘクスを占領する必要があります。ドニエプル川は D31.34 の北側では大河川となって川幅が減少し、渡りやすくなっています (ドニエプル川は幅が3kmのところもあり、ヨーロッパではヴォルガ川、ドナウ川に次ぐ第3の大河です)。枢軸軍プレイヤーはあなたと同じようにマップを研究し、それぞれの渡河点で強固な防衛点を作ることでしょう。果敢なソ連軍司令官は、どうすれば良いのでしょうか？
- あなたは2つの橋頭堡を持った状態でゲームを開始します。カニェフと B6.32 です。これらの場所に積極的に部隊を送り込み、枢軸軍を拘束しましょう。
- 「一箇所への集中攻撃」というアプローチの問題点は、枢軸軍には複数の機動部隊があり、むしろそれに対抗しやすいことにあります。それよりはるかに良いのは、ドイツ軍に対して多くの対処しなければならぬ課題を突きつけることです。複数の橋頭堡を作ることで防衛力を分散させ、渡河準備を見せつけ (本

当にそこで渡河する意志があるかどうかにかかわらず)、一方で秘密裏の渡河作戦も準備するのです。マスキロフカ (欺瞞作戦) を強く推奨します。

- どのようにして「枢軸軍を分散させる」のでしょうか？ あなたはドニエプル川沿いのあらゆるヘクスに2~3個のカウンターを置くことになるでしょう。その時、一番上のユニットの下にながしかのカウンターを密かに潜り込ませることができ (架橋工兵、ステップロスマーカー、機械化軍団など)。枢軸軍に渡し船を見せて、部隊を集中させるようにして、別の場所で渡河します。戦線の後方でも、下にあるカウンターを隠すためにユニットを有効活用するのです。
- 渡河と攻勢のために、戦場の準備を行います。警戒空域が重なるように航空基地を建設し、戦闘機を分散して配置することで、枢軸軍はそれらを制圧するために努力する必要に迫られます。あなたの航空ユニットは航続距離が小さく、ドイツ空軍に対して深く切り込んでいくようなことはできませんが、枢軸軍側が爆撃任務を行う前に航空優勢を確立しなければならないような地域を戦場に作ることができます。それは時間と共に彼らを消耗させるでしょう。そして枢軸軍の航空ユニットを常に叩くのです。自軍の航空基地や枢軸軍の航空ユニットが来そうな地点には、高射砲師団を配置しましょう (レベル3航空基地、高射砲師団、司令部があれば、対空射撃の修正が+6にもなり、5以上の目でステップロスを発生させられます)。
- 橋頭堡にはそれぞれ、目標ヘクス (ドニエプル川西岸の)、渡し船/架橋ヘクス、そして部隊を集結させ、予備部隊を置いておくヘクスが含まれることになるでしょう。ダブルターンの最初のターン (またはその前のターンのリアクションフェイズ) に渡河できるように、プレイの順序を工夫します。渡河を支援するために、砲兵砲爆撃マーカーをどのように使用するかを計画します。渡河できたら、橋頭堡を守るために陣地を作り、そこに部隊を詰め込んで橋頭堡の拡大に努めます。架橋工兵をグループにまとめましょう。架橋工兵ユニットは9つあるので複数のヘクスサイドに架橋工兵を設置できる場所を探し、特に、攻撃を1つのヘクスに集中できるようにします。あなたが部隊

を置く東岸ヘクスは障害地形である方が望ましいでしょう。橋頭堡を確保したらできれば正面軍を再編態勢に切り替え、橋頭堡に部隊を送り込んだり、陣地を建設したりします。

- ドニエプル川は渡らなければなりません、急ぐ必要はありません。準備をして、悪天候や飛行制限あり/飛行不可ターン、あるいはドニエプル川が凍結するのを待ちます。1月初旬か中旬には力を尽くさなければなりません、まだ先は長いのですから……。
- 適切な RVGK の管理は必須であり、特に戦車軍司令部をマップとの間で頻繁に行き来させることで、再編した独立ユニットを登場させることができます。RVGK は戦略的な再配置と、欺瞞作戦を実現させるために有効です。

### カルパチア山脈への前進

ついに！ ソ連軍がドニエプル川の線を突破し、ヒトラーのドイツ軍を粉砕する準備ができました。ここでも、枢軸軍が対処できないほどの数の課題を突きつけるべきです。

- 正面軍の攻勢/再編のサイクルを工夫して、再建された戦車/機械化軍団を RVGK から戦場に送り出しましょう。
- 「再編」態勢の正面軍は消極的な状態ではあるものの、「行動不可」というわけではないことを忘れないで下さい。戦線へと移動したり、ユニットを再配置したり、陣地を作ったり、空戦を行ったりできるのです。
- 「攻勢」態勢では、あなたは耕運機を走らせることとなります。あなたはドイツ軍のように、目にもとまらぬスピードで狭い範囲に侵入することはできません。たとえばソ連軍の戦い方は、斧を振り回して戦うとか、切り株を一つ一つ抜いていくとか、整氷車【スケートリンクの氷の表面を滑らかにするための車両】を走らせるような感じでしょうか。あなたの軍隊は広い戦線を西へと移動させていくには適していますから、あなたが攻撃する必要のない場所からドイツ軍が急いで脱出しなければならぬように追いつくべきなのです。
- 直感には反するかもしれませんが整氷車の戦術として、機動部隊をもって枢軸軍の防衛線を攻撃すると同時に、AR 3 と AR 4 の歩兵を予備モードにしておく

というものがあります。それらの歩兵部隊を突破フェイズ中に前方に移動させ、ドイツ軍の反撃を吸収させるのです。そして次のターンには、機動部隊を予備モードにすることができます。これを攻勢態勢の3ターンという短いサイクルと組み合わせ、地歩を獲得すると共に枢軸軍の予備部隊を引きつけた後に再編態勢に切り替えると良いでしょう。

- あなたは使用できる燃料以上の機動部隊を持っていることでしょうか。しかし、1944年3月から4月の間にはマップ西端に近づく必要があるため、なんとかしてそれらを移動させなければなりません。
- ゲームで突破口が開けると、ドイツ軍ユニットを追いかけて壊滅させたいという誘惑に駆られることでしょうか。しかし、ユニットを壊滅させてもVPにはなりません（VPヘクスにユニットがいて占領できない、という場合以外には）。勝利得点の方に目を向けて下さい！ キエフ、タルノーポリ、ウーマニ、ヴィニツァ、オデッサを占領した上で、さらにあと2つの地理的目標が必要です。リヴォフ付近かあるいはマップ南西端付近のエントリーヘクスに戦車/機械化軍団を1つ置くか、ルーマニアに降伏を強要するのです（ヤシ（C25.20とC26.20）を占領し、自軍ユニットをルーマニアへと退出させる必要があります）。いずれも簡単には到達できないでしょう。あなたはドニエプル川を越えたら、少なくとも1つの正面軍がリヴォフを目指して突っ走り、もう1つの正面軍が全力でルーマニアに迫る必要があります。

### ドイツ軍プレイヤー

クルスクで我が軍を阻止したソ連軍は、ウクライナ奪還を目指して反攻を開始した。年々ソ連軍の戦力は増強され、我が軍は替えが効かない部隊と人員を失っている。我々はドニエプル川の線を盾にして、それを渡ろうとする敵を撃破しなければならぬのだ！

OCSの中でも最も困難な、機動防御の舞台へようこそ。あなたは当時のドイツ軍が持っていた装甲部隊のほとんどを自由に使うことができますが、ゲームセンターの「モグラたたき」のような状況に追い込まれることになるでしょう。ここではいくつかの助言を紹介します。

- まずは、ソ連軍プレイヤー向けの記述を読んで下さい。その後、以下の項目を読んで下さい。
- さあ、敵にいかにか挫折を与えるかを考えましょう。敵の侵入に対処するためには、機動力のある部隊が必要です。戦線にいる装甲部隊をできるだけ早く歩兵と入れ替えます。複数ユニットフォーメーションのすべてを前線から引き離すのは難しいですが、それでもいくつかの「火消し部隊」を用意する必要があります。ただし、歩兵のステップを失いたくないところです（通常、毎ターン1Paxを獲得しますが、歩兵の1ステップを補充するには2Paxが必要です）。ソ連軍が求めてやまないドニエプル川にかかる鉄道橋は、陣地を作ってしっかりと守らなければなりません。
- あなたはゲームに勝つことができます。キエフ、ウーマニ、ヴィニツァのいずれかを保持すれば充分なのです。1944年3月と4月は泥濘のターンが多いので、泥の海でソ連軍を遅らせることができます。また、2月1日にドニエプロベトロフスクの北側のドニエプル川にユニットを置いていることでVPを獲得し、ニコポリ付近に橋頭堡を維持していることでもVPを獲得します。これらの地域の防衛をどれだけ維持できるか、です。最後に、ソ連軍は開始4ターンでポルタヴァのいずれかのヘクスを占領しなければなりません、そこにユニットやSPを空輸できないという人はいませんよね？
- 予備マーカーはたったの8個（！）しかありません。これは非常に重要です。予備マーカーは足りないと思いますが、あなたはソ連軍の侵入に対処するために、彼らのハイスティック（ドニエプル川の西側と東側にあることでしょうか）をDGにしてその力を削ぐことができます。予備マーカーはとても重要なので、常に他のユニットの下に隠しておくべきです。
- 可能であれば、戦略予備の部隊は降車可能ヘクスに配置し、必要に応じて鉄道輸送で再配置できるようにします。2個装甲師団を常にこのように配置するように努めましょう。これは、遠方にも派遣可能な緊急予備部隊です。
- ドニエプル川西岸の平地に渡る橋頭堡を相手が形成しようとしているのが見えたら、「ベアー【OCS班長】の1ヘクス後

退防御戦術」を検討しましょう。

- ◇ 1ヘクス後退します。
- ◇ ソ連軍に渡河させて、しかる後にそれをオーバーランします。
- ◇ 渡河してきたユニットを除去します。
- ◇ このようなキリングゾーンを作るにはイニシアティブを持っている必要があり、また10月の泥濘中にはより成功しにくくなります。
- ◇ 一方で、湿地帯への橋頭堡のようにあまり役に立ちそうにもない橋頭堡もあり得ますから、その方面にはいくらかの部隊を置いておくだけでいいでしょう。
- ドニエプル川西岸の平地ヘクスに陣地を建設することを恐れてはいけません。砲兵は重要であり、予備モードにできなくても分散させておくべきです。
- ソ連軍の歩兵を除去するのは良いことです。戦車/機械化ユニットはさらに良いでしょう。しかし最高なのは砲兵です。砲兵は彼らにとっての「戦場の女神」ですし、再建が困難なのです（ソ連軍は平均で15ターンに1砲兵ステップしか再建できません）。
- 枢軸軍はウーマニの東（B7.02）と北東（A59.12）に司令部を置き、5移動力+1ヘクスでウーマニからSPを受給できます。これで戦闘エリアの多くをカバーでき、ウーマニに置かれたSPのためには鉄道輸送力も輸送ユニットも必要ありません。
- 特別な司令部ユニットをうまく活用して下さい。大釜司令部は包囲されたユニットを持ちこたえさせ、味方戦線まですり抜けさせることができます。南方軍集団司令部は毎ターン使用するべき+1修正を持っています。
- ドニエプル川東岸にある自軍の橋頭堡、特にキエフ（B5.24）やザポロジェ（D44.15）などの都市ヘクスを陣地にして守りましょう。これらのヘクスを守るステップが常に補充されていっているならば、占領は非常に困難です。クレメンチュグ（D30.34）は魅力的に見えますが、その両側にソ連軍ユニットがいたらZOCでブロックされてしまう可能性があります。
- 複数の航空基地を建設し、前線の各エリアに2つの警戒空域を設けます。航空基地はレベル2まで上げておき、凍結でも2ユニットを整備できるようにしておきます。爆撃機をウーマニとオデッサの近

くに配置すれば、マップ全体をカバーできます。また、前線に近い航空基地にスツーカーを置けば、爆撃時に右コラムシフトを得ることができるでしょう。

- ソ連軍部隊の侵入に対して正面から戦うと、枢軸軍の機動部隊が全滅してしまうことも充分にあり得ます。消耗戦では勝てませんし、ソ連軍側は戦いを望んでいるのです。前進する敵を避けて、側面から攻撃できませんか？ 最初の1～2ヶ月に戦闘しまくっていると、後半はさらに厳しくなるでしょう。装甲部隊でかき分けて進むのは楽しいものですが、戦力の消耗が激しく、1944年2月には戦線がスカスカになってしまうかもしれません。あるソ連軍プレイヤーなどは、枢軸軍の歩兵のステップをとにかく減らして防衛線を張ることが不可能になるような作戦を行っていました。
- あなたの装甲部隊と空軍は絶え間なく戦って消耗していき、ある時点でソ連軍の橋頭堡のいくつかから突破が始まるでしょう。ここで最も重要なのは、ドニエプル川を放棄する「タイミング」の決断です。ドニエプル川が凍結していたら、まさにその時かもしれません。そして後退し、障害地形や大/小河川の線を利用していくことになります。ドニエプル川ほどの強固な防御線は二度とありませんから、慎重にその時を決断して下さい。

## 参考文献

### 主要な資料

- Bergstrom, Christer (2005): 『ドイツ軍戦闘機』(複数巻), Englewood Cliffs, New Jersey, Classic Publications
- 『ソ連の軍組織』, Official Second World War Soviet Army order of battle published in five parts, Moscow, Russia, Voroshilov Academy of the General Staff and Voenizdat, 1963-1990.
- カール＝ハインツ・フリーザー (2017): 『ドイツ軍と第二次世界大戦 第8巻 東部戦線1943-44』, Oxford, United Kingdom, Oxford Press
- Hardesty, Von (1982): 『赤い不死鳥：ソ連空軍の隆盛』, Hopkins, Minnesota, Olympic Marketing Corp.
- Hinze, Rolfe (2009 英訳版): 『苦闘：

1943-44 ウクライナでのドイツ軍の防衛戦』, West Midlands, United Kingdom, Helion & Co.

- Jentz, Thomas L. (1996): 『装甲部隊：ドイツ軍戦車部隊の創設と戦闘配備完全ガイド』, Atglen, Pennsylvania, Schiffer Publishing, Ltd.
- 43年9月から44年4月の東部戦線戦況地図。 <https://forum.axishistory.com/> で Axis Forum から入手可。
- Madeja, W. Victory (1987): 『独ソ戦 第2巻 1943年夏から1944年春』, Game Book Marketing Co.
- Marchand, Jean-Luc (2010): 『第二次世界大戦のソ連軍戦闘序列』13～16巻(月毎の部隊配属), West Chester, Ohio, Nafziger Collection
- Nafziger, George F. (2000): 『ドイツ軍の戦闘序列』(全3巻), London, UK, Greenhill Books/Lionel Leventhal
- Nafziger, George F.: 『第二次世界大戦のルーマニア軍戦闘序列』, Bainbridge Island, Washington, Barbarossa Books
- Nevenkin, Kamen (2008): 『火消し部隊 1943-1945の装甲師団』, Winnipeg, Canada, J J Fedorowicz Publishing
- Niehorster, Leo W.G. & Cole, Lowry (他): 『ドイツ軍 1933-1945 戦闘序列』、複数巻, Milton Keynes, UK: Military Press
- Sharp, Charles C. (1995): 『第二次世界大戦ソ連軍の戦闘序列』2～12巻(部隊史), West Chester, Ohio, Nafziger Collection
- Tessin, Georg (1967): 『ドイツ軍戦闘序列(第二次世界大戦におけるドイツ国防軍と武装親衛隊の部隊、1939～1945年)』, Frankfurt am Main, Germany, Mittler

その他、挙げきれないほどの部隊史本、裏付けとなる書籍や資料など。

### 一般の読者向けの本

- プリット・バッター (2019年): 『リトリビューション：ソ連軍によるウクライナ中央部の再征服 1943年』, Oxford, Osprey Publishing  
(その続編である『レコニング：南方軍集団の敗北、1944年』は2020年11月に出版されたばかりで、ゲーム制作の参考にするには遅すぎましたが、これも読み応えのあるよくできた作品でした)

- パウル・カレル (1994): 『焦土：独ソ戦 1943-1944』, Atglen, Pennsylvania, Schiffer Publishing, Ltd.【邦題『焦土作戦』学研M文庫、他】  
(カレルは多くの逸話を交えて非常にドラマチックに描いていますが、彼はナチスのプロパガンダ担当者であった過去があり、「清廉潔白なドイツ国防軍」という視点に偏っているということを理解しておいて下さい!)
- Erickson, John (1983): 『ベルリンへの道：スターリンの独ソ戦』, New Haven, Connecticut, Yale University Press
- Fey, Will (1996): 『武装親衛隊の機甲戦 1943-1945』, Winnipeg, Manitoba, J.J. Fedorowicz Publications
- Harrison, Richard W. (2018): 『ドニエプル川の戦い』, West Midlands, United Kingdom, Helion & Co.
- Haupt, Werner (1998): 『南方軍集団：ロシアにおけるドイツ国防軍 1941-45』, Atglen, Pennsylvania, Schiffer Publishing, Ltd.
- エーリヒ・フォン・マンシュタイン (1958): 『失われた勝利』, Chicago, Illinois, Henry Regnery Co.【和訳本は中央公論社から出版】
- Nash, Douglas E. (2002): 『地獄の門：チェルカッシー包囲戦 1944年1月～2月』, Stamford, Connecticut, RZM Imports.
- Nebolsin, Igor (2015): 『スターリンお気に入りの部隊 第1巻：1943年1月～1944年6月：クルスクからベルリンに至る第2親衛戦車軍の戦闘史』, West Midlands, United Kingdom, Helion & Co.
- Reynolds, Michael (1999): 『鋼鉄の兵士達：第1SS装甲軍団：アルデンヌと東部戦線 1944-45』, Cambridge, Massachusetts, Da Capo Press
- Reynolds, Michael (2008): 『第三帝国の息子達：第2SS装甲軍団の歴史』, Philadelphia, Pennsylvania, Casemate Publishers
- Vuksic, Velimir (2005): 『東部戦線のSS機甲部隊 1943-1945』, Winnipeg, Manitoba, J.J. Fedorowicz Publications
- Ziemke, Earl F. (1968): 『モスクワからベルリンへ：東部戦線でのドイツ軍の敗北』, New York, New York, Military Heritage Press